



# ジュネーブ便り 第14回

インダストリアル本部造船・船舶解撤  
ICT電機・電子部門担当部長

松崎 寛

## スポーツ強国スイス ～アスリートを支える人材育成システムの秘密とは～

2月25日に閉幕した第23回冬季オリンピック平昌大会では、日本選手団は金4、銀5、銅4と史上最多13個のメダルを獲得し、メダル獲得世界ランキングで第11位。メダルラッシュに日本中が歓喜に包まれ、遠く離れたスイスの地でも感動と勇気をもたらしました。その一方で、人口は約800万人、国土は九州と同じくらいの小国スイスは、金5個、銀6個、銅4個の15個のメダルを獲得。大会前に目標に掲げた11個を大幅に上回り、世界ランキングでも8位と堂々のトップ10入りを果たしました。なぜスイスは強いのか？自然豊かな環境のなかでウインタースポーツが盛んなお国柄とはいえ、そこには確固たる人材育成戦略が備わったシステムが構築されています。本稿では、私なりにスポーツ強国スイスの強さを「人づくり」の観点から秘密を探っていききたいと思います。

### 平昌オリンピックメダル獲得数と人間開発指数(HDI)ランキングの関係

最近、持続可能な産業政策に関連する仕事をしているなかで、人間開発指数(Human Development Index, HDI)に目を通す機会が幾度となくありました。そうしたなか平昌オリンピックが閉幕し、メダル獲得ランキングの結果を見てハッと気が付いたことがあります。「HDIランキング上位国と冬季オリンピックメダル獲得ランキング上位国になにか関係があるのではないか？」

実際に、ウインタースポーツがあまり盛んではない、あるいは平昌オリンピック出場者が極端に少ない国を除くと、HDIランキング上位国とメダル獲得上位国とがほぼ同じ国であることがわかります(図表1)。HDIとは、国連開発計画(UNDP)が毎年公表している平均余命、教育、所得

の側面から人間開発の達成度を示す指数、言い換えれば、社会の豊かさや進歩の度合いをはかる包括的な経済社会指標です。HDI上位国は、長寿で健康的、所得・教育格差が少なく、人材・能力開発に対しての機会均等(あるいは選択肢)が充実している国であることを意味しています。

ウインタースポーツは他の競技よりも比較的费用がかかるうえ、雪質などコンディションの整った時期に集中的に練習するため、ある程度余裕もつた時間を確保する必要があります。ここでスイスのウインタースポーツに関する環境をHDIにあてはめてみると、①公立学校では初等から高等教育まで基本的に無償教育である、②所得水準に応じてスポーツ・音楽・芸術教育に州政府から補助金が支給される、③学校教育においてウインタースポーツに集中するため州ごとに最低1週間以上の「スキー休暇」が設定されている、④ケガしても充実した医療体制がサ

【図表1】平昌オリンピック 国別メダル獲得数

順位	国名	金	銀	銅	合計
1	ノルウェー	14	14	11	39
2	ドイツ	14	10	7	31
3	カナダ	11	8	10	29
4	アメリカ	9	8	6	23
5	オランダ	8	6	6	20
6	スウェーデン	7	6	1	14
7	韓国	5	8	4	17
8	スイス	5	6	4	15
9	フランス	5	4	6	15
10	オーストリア	5	3	6	14

人間開発指数(HDI)ランキング 2013～2015

順位	2013	2014	2015
1	ノルウェー	ノルウェー	ノルウェー
2	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア
3	スイス	スイス	スイス
4	オランダ	デンマーク	ドイツ
5	アメリカ	オランダ	デンマーク
6	ドイツ	ドイツ	シンガポール
7	ニュージーランド	アイルランド	オランダ
8	カナダ	アメリカ	アイルランド
9	シンガポール	カナダ	アイスランド
10	デンマーク	ニュージーランド	カナダ

ポートしてくれる、⑤将来スポーツ・芸術方面に就きたい子女への特別支援体制が整っているなど、所得や家庭環境に関係なく、将来はプロスポーツ選手、あるいはオリンピックを目標したすべての子供に平等な機会が与えられる人材育成システムが構築されています。このことはHDIランキング14年連続トップで、かつ平昌オリンピックメダル獲得数1位のノルウェーにも当てはまります。同国は、医療費と教育費が原則無料な高福祉国家であるほか、スポーツを含む教育訓練・人材育成にアクセスする機会の平等性が極めて高い国であるといわれています。HDIと冬季オリンピックメダル数には相関関係があるかもしれませんが。

## スポーツと職業訓練の両立を可能にする「特別デュアルシステム」

以前本誌においてスイスの教育制度を紹介しましたが(ジュネーブ便り第4回)、スイスでは義務教育課程を終えると、ほぼすべての生徒が進むべき道を決めます。中学卒業後、約7割の若者は職業訓練の道に進み、公式に認められている22の分野で約230種類の職種から、自分に合う職種を選び、職業訓練と一般教養教育の両方をデュアルシステムで並行しながら資格と能力

を実践的に身につけ、各州が管轄する能力資格試験に合格すれば職人・専門職としての道を歩んでいきます。19歳になるころには、専門知識・技術を身につけ、明確な目標をもって社会人になっていきます。しかし、この22分野には、スポーツは入っていません。では、プロスポーツ選手を目指すにはどうすればよいのか。スイスでは、プロスポーツ・音楽家・芸術家を志す子供たちには、中学から高校・職業訓練校まで通常カリキュラムとの両立が可能となるよう、時間配分が工夫された特別時間割クラスを選択することが出来ます。例えばジュネーブ州の中学校では、特別時間割クラスの子供は、スポーツ・音楽・芸術の授業が免除になるほか、朝練・午後練の時間が確保され、かつ水曜日は

【図表2】 公立中学校における通常時間割と特別時間割の比較(ジュネーブ州の事例)

通常時間割 (月火木金)	特別時間割 (月火木金)
07:55 授業 (3時間半)	08:45 自由時間・練習
11:25 昼休み	授業 (3時間 25分)
13:35 授業 (2時間半)	12:10 昼休み
16:05	12:45 授業 (2時間 25分)
	15:10 自由時間・練習・校外活動 (クラブチームなど)
通常時間割 (水曜日)	特別時間割 (水曜日)
授業 07:55-11:25 (3時間半)	終日授業なし (集中練習)
週当たり授業時間: 27時間半	週当たり授業時間: 24時間 20分

\*必修科目(フランス語、英語、ドイツ語、数学、理科、社会)の授業時間は同じ。

職人・専門職として仕事に就くことが出来ます。スイスの若年層失業率は3.1%(2017年)と、他のヨーロッパ主要国(ドイツ6.7%、オランダ9%、イギリス12.3%、フランス21.6%、イタリア37%、スペイン38.6%)と比べてもダントツ

まる一日通常授業がないため練習に集中することが出来ます(図表2)。さらに、そのような生徒であっても、進学、あるいは職業訓練に必要な必修科目の授業は通常と同じ時間を確保しています。つまり、スポーツ・音楽・芸術と学業・職業訓練の両立をはかる特別なデュアルシステムを受けることができるのです。スポーツクラブチームや音楽・芸術学校は公立学校の特別時間割と連携しており、練習時間と授業・技能訓練時間が重なることはありません。ケガなどでプロスポーツ選手の夢をあきらめざるを得なくなっても、あるいはプロアスリートからセカンドキャリアへの選択を迫られても、特別なデュアルシステムで資格と能力を実践的に身につけるため、職人・専門職として仕事に就くことが

**松崎 寛** まつざき かん  
1998年金属労協に入局。国際局、政策局で主任として産業政策、環境政策の立案をはじめ海外労使紛争防止ツールの作成などに活躍。2010年9月1日から家族同伴でIMF本部(現インターストリオール)に赴任。現在の担当役職は、産業政策・多国籍企業政策グループの造船・船舶解撤/ICT電機・電子部門担当部長。



の低さを誇っており、こうした「人づくり」の強さが、スポーツのみならず、経済・社会の面においても世界トップクラスの国際競争力を維持するスイスの強さの源泉かもしれません。日本では、プロ野球戦力外通告「クビを宣告された男達」などのテレビ番組が放送されていますが、その内容からみても、改めてキャリア教育後進国であると感じてしまいます。インダストリー4.0などで、これからますます仕事が激変していく時代。日本は初等教育からの人材教育・育成システムを抜本的に見直す必要があるのではないのでしょうか。